

国際コミュニケーション力養成のための M-Skype

M-Skype for development of global communication skills

○森村 久美子^{※1}
Kumiko Morimura

ヨルグ エントジガー^{※1}
Jorg Entzinger

鈴木 真二^{※1}
Shinji Suzuki

キーワード：コミュニケーションスキル、スカイプ、米国大学生、言語交換、多様性
Keywords: Communication skills, Skype, Campus life in US, Language Exchange, Diversity

1. はじめに

大学の国際化が叫ばれて久しいが、大学内での国際化は進んでいるのだろうか。確かに留学生の数を増やす、外国人教員の数を増やす、英語での講義数を増やすなどといった量的な国際化はここ2,3年の間に着実に進みつつあるように見える。しかし、一方で国内学生の真の意味での国際化は本当に成されているのだろうか。世界共通語(リンガフランカ)としての英語教育の充実のみならず、他国の文化・風習の理解といった多様性の理解は進んでいるのだろうか。島国として他国と国境を接さない日本では、外国人と交わらなくても生活は可能である。いきおい異文化、宗教、風習に対する理解度は低く、国外に目を向けないまま大学生活を終えてしまう学生が大多数である。

2. バイリンガルキャンパス推進のために

工学部・工学系研究科では、2009年度以来、留学生と日本人学生が英語と日本語でシームレスに話し、ともに研究や教育を行うバイリンガルキャンパスの構築を計画している。具体的には、2020年までに留学生数を30%まで増やし、工学系の英語での授業を大学院で25-50%、学部で10-20%まで増やそうと計画している。これを実現するために、著名な外国人教員の招聘や若手教員の海外大学への派遣、英語の教授法の確立、学生の活発な交流などが具体的目標として検討されている。

3. 創造性工学プロジェクト

国際工学教育推進機構が2009年度より行っている創造性工学プロジェクトは、工学部の本質である「ものづくり」を中心に据え、学部、学年の垣根を越えた少人数ゼミ形式でプロジェクトを行い、他学部の学生と議論を交わし、上級生が下級生を指導する中から学際的な考え方やリーダーシップのとり方などを学ばせようとするものである。

^{※1} 東京大学大学院工学系研究科 国際工学教育推進機構 バイリンガルキャンパス推進センター

2009年には11プロジェクトがスタートし2010年には15プロジェクトが行われた。2011年度からはこれに「国際化」というキーワードが加わった。筆者らは2011年冬学期のプロジェクトの一つとして、昨今若者の間で一般的になっている「スカイプ」を通して海外の大学生と会話する中から日米学生間の言語、文化、生活の相違を学生自身に気づかせ、多様性を実感させるとともに学生の海外志向を助長しようとする”M-Skype”プロジェクトを行った。

4. M-Skype

”M-Skype”とは米国のマサチューセッツ工科大学(MIT)とのスカイプセッションプロジェクトである。MITの学生の中で日本語を副専攻とする工学系の学生数名と東京大学の工学系学生数名がこのプロジェクトに応募した。日本語を学びたい米国人学生と英語を学びたい日本人学生が会話する中でそれぞれの母国語を教え、第2言語を学ぶ言語交換(Language Exchange)である。日本語を学びたい米国人学生にひたすら日本語を教えるのは大変な苦勞である。一方、日本人学生のつたない英語をひたすら聞いてもらうのは米国人学生にとっては負担である。負担を双方で軽減するために、最初の30分は日本語で、次の30分は英語で、残りの30分は話し合って選択した言語で話すことをルールとした。またスカイプセッションを持つ際に、東京とボストンの時差を考慮するというのも学生にとっては初めての体験であったが国際交流の現実を実感する一つのきっかけとなった。



図1. クラスの中でスカイプを行う

プロジェクトでは、第1週はクラスディスカッションでトピックについて話し合う。どんな話題が適切で双方関心があるかを検討し、そのトピックについてあらかじめ調査し、内輪で討論を行った。考えがまとまっていないと英語では話しづらいからである。第2週はスカイプセッションを行う。MITと東大の学生でペアを指名し、双方でemailを送り合いアポイントを取って都合のいい時間帯にスカイプを行うよう指導した。時差だけでなく、各国の学生により都合のいい時間帯は異なるからだ。その週はクラスルームでは集まらず、各自、家庭なり研究室なりネット接続環境の良いところでスカイプを行うこととした。第3週は、スカイプで話したことをクラスルームに持ち帰り、上手いこと、苦労したこと、反省点などを報告した。うまくいかなかったことについては、なぜうまくいかなかったのか原因を探り、語学の問題、トピックの問題、ネットの問題など原因を掘り下げた。これらを3週を一つの単位として5クール繰り返した。

5. アンケート

15週間のプロジェクト期間の最後にアンケートを取った。アンケートでは、スカイプ授業がコミュニケーション能力の養成に役立ったか、どんなトピックが望ましいか、何をプロジェクトから学んだかなどについて尋ねた。結果を下に示す。

まず、スカイプでの会話が自身のコミュニケーション能力の養成に役立ったかという問いには90%の学生がイエスと答えている。

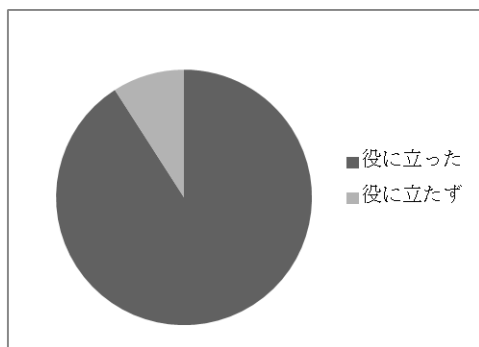


図2. コミュニケーション能力養成に役に立ったか

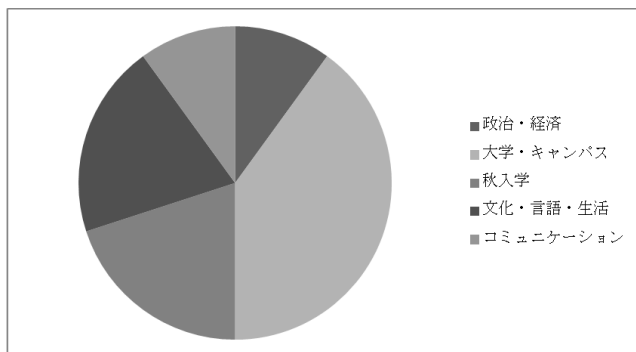


図3. 会話に適したトピックは何か

最後にプロジェクトから何を学んだかを尋ねた。自由回答であったが、他国の学生の考え方と文化の違い、言語には複数の回答が寄せられた。

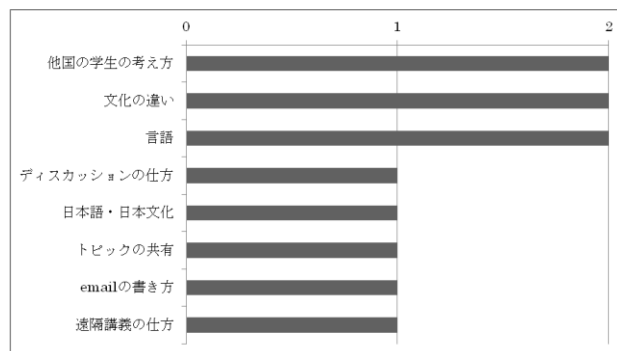


図4. プロジェクトから何を学んだか

これらの回答結果を見ても明らかのように、学生たちはスカイププロジェクトがコミュニケーション能力養成に非常によく役立ち、プロジェクトから多くのことを学んだと感じている。外国の学生の生活やキャンパスの様子、言語、文化を学び、自分が日本語や日本文化についてもっと知識を持つべきだということもわかった。また、ディスカッションの仕方や、emailの書き方、遠隔講義の仕方などの方法論も学んだようである。

スカイプは画面を通して顔が見えるため電話よりも相手が身近に感じられる。特に外国語の場合は、顔が見えることがコミュニケーションの助けになることは間違いない。こういった意味で、今後もスカイプを用いた遠隔会話は外国語習得に有効だといえよう。

6. おわりに

本プロジェクトの終了直後に学生をMITに同行させる機会があった。対面で会うのは初めてであったが、スカイプを通して会話していた学生同士だったので旧知の間のように話げできたことは自明のことであった。



図5. スカイプの相手と対面で話をする学生達

参考文献

- 1) 森村久美子, 鈴木真二, "グローバル化の中でのダイバーシティ", 日本工学教育協会平成22年度工学・工業教育研究講演会, pp236-237, 2010.08